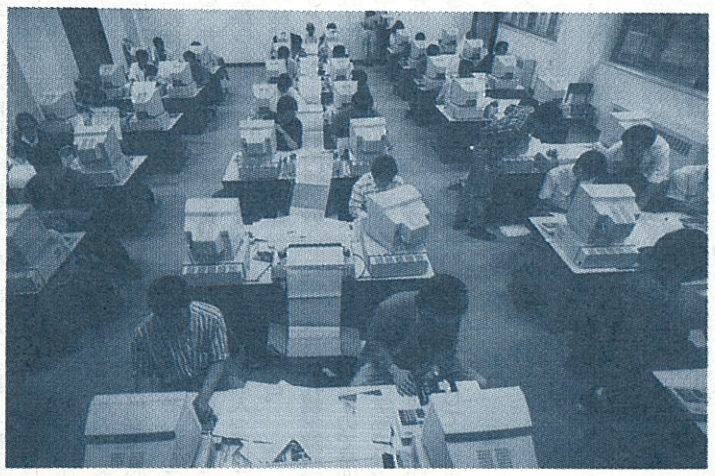
札幌学院大学
商学部　人文学部　法学部　薬学部
商学科　経済学科　人間科学科　英語英米文学科　法律学科　商学科

Sapporo Gakuin University
学園広報

1990. 2. 28　No. 45
編集・発行　学校法人　明和学園
札幌学院大学　庶務課
〒069　北海道江別市文京台11番地
電話（011）386—8111

平成三年四月開設予定
社会情報学部設置申請の一次審査通過



社会情報学部の設置

去る一月十日、社会情報学部設置申請に対する第一次審査の結果の書面を東京で受け取った。情報系学部の新設についてはかねて本学で検討されてきたところであるが、一昨年十二月二十一日に開かれた全学教授会で、出席者三分の二以上の賛成のもとその設置がきまり、理事会は、昨年七月文部省に学生定員二百名でその設置を申請したのである。

この学部は、全国のなかでも初めてであるが、幸い文部省の理解も急速に進み、比較的順調に一次審査の通過まで漕ぎつけることができた。

さて、私立大学の学部新設は文部省の認可事項であって、その審査は二カ年に亙る。第二年次には各授業科目を担当する教員の審査がまっている。最近では、当初から教員予定者をその就任承諾書とともに準備しておかなければならない。

既に社会学および情報学の優れた研究者が教員予定者として確定している。いずれも立派な方々なので、第一次審査と同様、二年次の審査もスムーズであることを期待している。

社会情報学部とは

今や情報処理の素養をもたないで社会の各分野で活動することは難しくなってきている。このような社会の情勢を反映してか最近新設される多くの学部あるいは学科には経営情報に関するものが多い。経営情報学部あるいは経営情報学科は、経営現象に現れる多くの課題を経営学の素養の上に立って把握し、その課題の解決に情報処理手段を用いようとするものである。これに対し、社会情報の名称をもつ学部はまだ他に例をみないようである。社会情報学部は、社会学の素養の上に立ってひろく社会現象の課題を把握し、その課題の解決を情報学の素養および情報処理手段に基づいて行うものであって、このような人材の養成と、そのような課題の研究が学部設置の目的である。

教員予定者は、社会学および情報学の各分野ほぼ同数の専門家からなっている。この学部では、社会学と情報学の何れかにやや比重をおいた標準カリキュラムを作成し、これに基づいて教育を行う予定である。また、社会学と情報学の何れか一方に偏ることがないよう、社会学と情報学の何れの基本についても体系的な履修を期している。また、プログラム言語の実習については、少人数教育を徹底して行うことができるよう種々方策を検討中である。

社会情報学部と本学の発展

本学は文系の三学部を擁しており、文系総合大学としての発展の道を歩んできている。平成二年度には現在の商学部経済学科を経済学部に昇格するための申請を準備中であり、平成三年四月からは五学部をもつ総合大学としての偉容をもつ筈である。五学部体制は道内私立大学最大の規模であって、そこに本学の著しい発展の姿をみることができる。これに加えて特筆すべきことは、「社会情報学部が文系と理系の両面をもつ学部である点である。この意味で、平成三年四月は本学の飛躍の年であるということがいえよう。

言うまでもないことであるが、大学はその規模の大きさなど量的な側面のみを誇りとすべきものではない。研究と教育の成果が質的に高くなってゆくことが基本である。新学部の設置は新しい教員を求めることを余儀なくさせる。このことによって本学の動脈を流れる血液がより新鮮なものとなり、教育と研究の質が一段と向上することを全学を挙げて期待している。

新校舎の建設に着手
社会情報学部と既設学部の充実を施設面からサポート

C館・D館

平成三年四月開設予定の社会情報学部に向けて、C館・D館（八、五八六㎡）の新築工事が間もなく開始される。

このC・D館は、社会情報学部と既設学部の充実を施設面からサポートするため、本学園の「キャンパス整備基本構想」に基づく「キャンパス整備第二期計画」の一貫として計画された建物である。

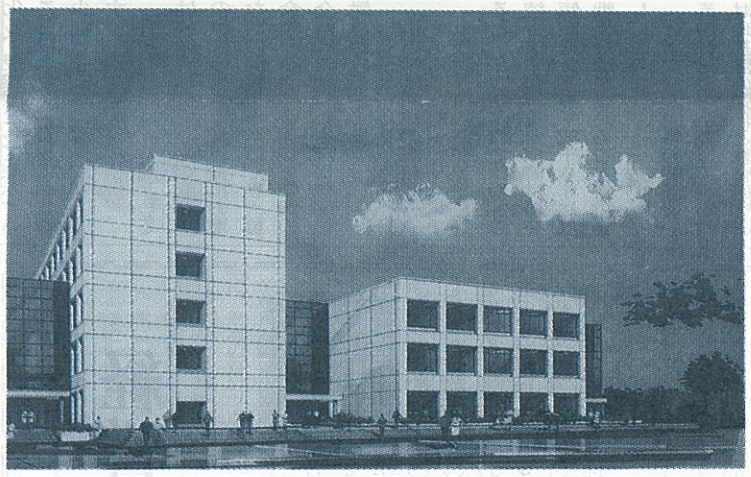
C・D館を建設するにあたり、「社会情報学部及び既設学部への対応」という目標の他に、北国におけるキャンパスづくりとして、冬期間の活動の拠点となるような空間などを確保すること、また、キャンパス全体のエネルギー設備の整備、そして、今後の情報化社会に対応しうる学内の情報ネットワークの整備などの目標を挙げ設計に当たった。

この建物が完成することにより、社会情報学部はもちろんのこと、既設学部の教室及び演習室の利用効率の改善、北国における移動空間の確保など、学生生活を送る上で、なお一層、施設の整備が図られることになる。

C館及びD館の施設の概要

構造：鉄筋コンクリート造
地下一階地上五階
規模：八、五八六㎡
C館：電算機センター
情報処理実習室
教室・演習室
研究室・会議室
D館：中教室

なお、この建物は、本学園の情報の中心である電算機センターを持つため、キャンパス全体の情報ネットワークの要となり、インテリジェント化の中心的な役割を担うことになる。そのため、様々な工夫が凝らされており、完成が待たれている。



C館・D館完成予想図

お知らせ

平成元年度卒業式
三月十七日(土)
北海道厚生年金会館ホール
午後零時三十分

卒業祝賀会
三月十七日(土)
京王プラザホテル札幌
午後三時三十分

平成二年度入学式
四月四日(水)
北海道厚生年金会館ホール
午後二時

キャンパス・リポート

Self Access Booths & Studio

AV時代のニーズに答える

近年、オーディオ・ビジュアルの波が教育機関の中にもどんどん押し寄せてきている。

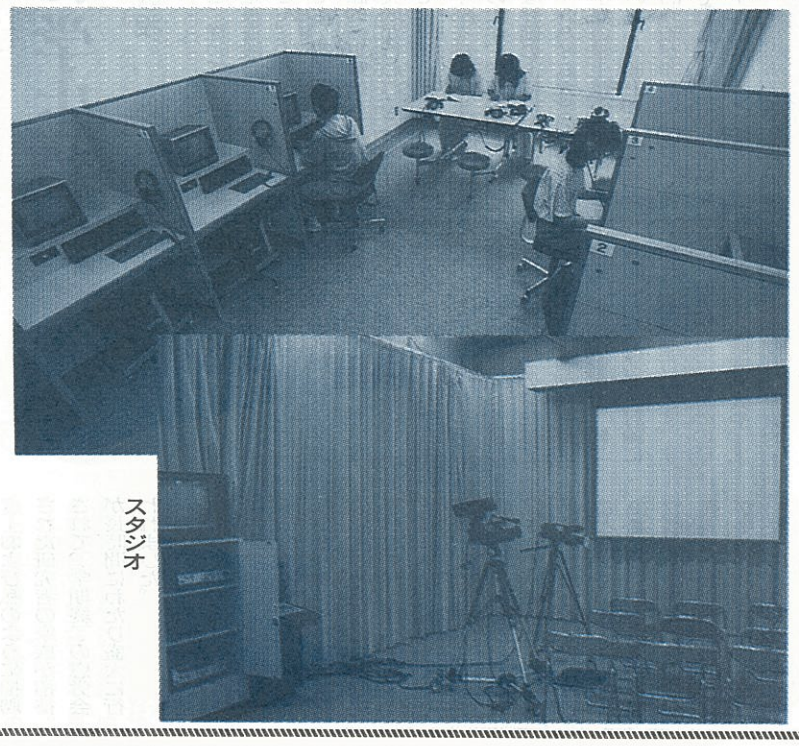
本学では、昭和六十年十一月にA・B館が完成、最新のLL・AV設備を導入している。A館2階にはセルフ・アクセス・ブースとスタジオがあり、学生・教職員のニーズに答えている。

セルフ・アクセス・ブースには、Uマチック、ベータ、VHSのビデオデッキ八台と、LLテープレコーダーが八台備え付けられている。すべてのデッキにヘッドセットが付いているので他人を気にせずビデオを楽しんだり、発音練習などの勉強に専念できる。

この部屋では、学生が映画を見ながら英語や中国語などの語学の勉強をしたり、又、卒論のためにビデオ撮りした資料の分析なども行っている。教員にもビデオ、オーディオ教材の内容研究によく利用されている。

スタジオは撮影専門の部屋であり、ここにはビデオカメラ二台、ビデオデッキ二台、ミキサー、スイッチャーなどが備え付けられている。ここは学生の課外活動によく利用され、ビデオ、16ミリフィルム上映会などが催される。その他、楽器の録音や8ミリフィルムの編集などにも利用されている。

全般的にスタジオは撮影という本来の使用法より、複数でのビデオ視聴というのが多いようだ。これからは、ビデオカメラや編集機の使用法をマスターし、自主製作ビデオを制作したいという学生が多くなることを望む。



セルフ・アクセス・ブース

スタジオ

チンギス・ハンの陵墓探索

鶴丸俊明助教授が海外学術調査に参加

鶴丸俊明助教授

チンギス・ハンといえば、十三世紀に広大なモンゴル帝国をきずき、西方遠征でヨーロッパを震撼させた草原の英雄として、知らぬ人はいないだろう。

このほどそのチンギス・ハンの陵墓探索を主目的とする壮大な国際的学術調査「ゴルバン・ゴル（三つの川）計画」が、わが国の読売新聞社とモンゴル人民共和国科学アカデミーとの協力で実施されることになり、本学人文学部の鶴丸俊明助教授がその考古学調査班の中心的メンバーとして招かれ、この四月初め、現地へ向けて出発することになった。モンゴル滞在期間は八月中旬までである。

これまで長く謎とされてきた陵墓の位置は、モンゴルの研究者によって、ヘンテ山脈近辺を流れるオノン川、ケルレン川、トーラ川という三つの川の流域に絞りこまれているといわれる。「ゴルバン・ゴル計画」は、一年に一河川流域ずつ、三年間にわたって調査を続ける予定で、考古学チーム以外に衛星探査チームや物理探査チーム等も編成、ハイテク技術を備えた強力な陣容で世紀の謎に挑む。

鶴丸助教授は、北アジア先史学が専門で、その研究業績や海外学術調査の経験から、今回の計画に不可欠な研究者と目され、その参加が懇望されていたものである。

法律が身近になった

第3回法学部講演会

第三回法学部講演会は平成元年十一月十三日、立ったままで聞く学生も出る程で埋まった三三〇二室で行われた。

今年度はより身近に法・法律そして法律家を意識してもらおうと、高校教師の経験もあり、日常生活にかかわる事件を多く手掛けられ、わかりやすい文脈で書かれた多くの著作もある（しかもこの著作を二教員が授業に使用している）弁護士の井口茂先生を東京からお呼びした。テーマは「法律と人間―法学を学ぶ喜びと悲しみ―」。丸の内線での五十円玉事件、有名大学教授半同棲・遺言事件等々、東京弁的新潟弁で実体験に基づき、淡々としかも実に軽妙なタッチで語られた。「法律学は大変人間くさい学問だと感じております。そこに法律学の面白さがあるんだなあという風に実は思っているんですね―。……実は皆さん方が今現に学んでいらっしゃる法律学の中でも面白さは心がけ如何によってはね、学びとることができるんですね。一番てっとり早く学べるのは判例をじっくり読むことです。……代物弁済、遺言等に触れましたが、皆これ人間の欲、愛、恋、意地、感情とか、それからそれと社会の制度との関連、こういう問題が全部入っているんです。……」と。

講演の全容は札幌学院法学七巻に掲載予定ですので是非ご一読下さい。法学部で学ぶべきこと、法の意味等が感知いただけると信じております。

平成2年度 学費改訂について

去る平成元年十二月七日に開催された第八十五回理事会において、平成二年度学費を表のとおり改訂することが決定いたしました。

〔I〕学費改訂の主な理由

① 学園は、教育研究条件の改善の大きな柱として、学部学科の充実のために新学部の設置と商学部の改組に取り組んでいるところです。

平成元年度については、教育研究の維持発展のために必要な費用の積算を行い、収支のバランスが取れる最小限の学費改訂を行い、教育研究条件の整備として教育研究機器等の充実と、校舎建設等の基本計画・設計に取り組んできたところです。

② 平成二年度予算編成においては、校舎建設の実施年度に当たりますので、経費の効率的運用と一層の節減を図り、一方では、教育研究条件の維持発展のための予算編成に努めてきました。しかし、人件費、教育研究経費、管理経費の増加が見込まれ、対応する収入の増が少ないことから消費収支の均衡を取ることが困難な状況です。

〔II〕学費区分表示の変更

平成元年度から学費の一部（施設費、維持費等）に消費税がかかることになっています。そこで、平成二年度から授業料と施設・維持費を一本化し、授業料として表示することにより、消費税の負担を少なくするようにいたします。

消費税に対し、学園としては公教育機関としての大学への課税の是非、父母負担の増などの問題点を挙げ、私大協会等の諸団体を通じて学費の全面的非課税化を関係機関に働きかけております。

〔III〕学園財政の課題

十八歳人口の将来予想を見ると、平成四年までは増加が続きますが、それ以降は減少傾向をたどり平成十八年には戦後最低を迎えることが確定しております。

今後、学園内外の関係者の英知と総力を結集して、学園財政基盤の強化と教育研究の充実・発展に向けての取り組みを一層強化する必要があります。

平成2年度学費

(1)商学部第一部、人文学部、法学部

イ、平成2年度入学生（1年生）の初年度の学費　（単位千円）

	平成2年度 新学費	平成元年度 現行学費	改訂幅 額	改訂幅 率(%)
入学金	150	150	0	0.0
授業料	593	407	36	6.5
施設維持費	――	150		
合計	743	707	36	5.1

ロ、平成2年度以前の入学生（2年生以上）の学費　（単位千円）

	平成2年度 新学費	平成元年度 現行学費	改訂幅 額	改訂幅 率(%)
授業料	593	407	36	6.5
施設維持費	――	150		
合計	593	557	36	6.5

(2)商学部第二部

イ、平成2年度入学生（1年生）の初年度の学費　（単位千円）

	平成2年度 新学費	平成元年度 現行学費	改訂幅 額	改訂幅 率(%)
入学金	75	75	0	0.0
授業料	343	292	21	6.5
施設維持費	――	30		
合計	418	397	21	5.3

（注）平成2年度商学部第二部入学生の第2学年以降の学費については、4年間の学費総額の上限を175万円とし、この範囲内で改訂します。

ロ、平成2年度以前の入学生（2年生以上）の学費　（単位千円）

	平成2年度 新学費	平成元年度 現行学費	改訂幅 額	改訂幅 率(%)
授業料	343	292	21	6.5
施設維持費	――	30		
合計	343	322	21	6.5

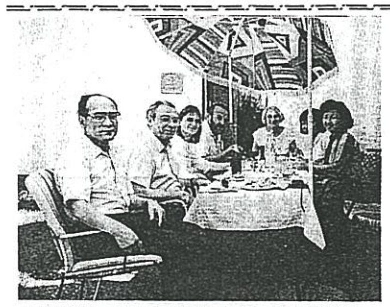
マンハイム大学の研究教育（下）

経営経済学部に学生殺到

商学部教授　藤永　弘

本号では、私の所属した経営経済学部の研究教育を取り上げることにします。

経営経済学部は、全学八学部の学生約一二、〇〇〇名のうち、約六、〇〇〇名を擁する学部です。この学部の学生数は、過去五年間で約二・五倍になっています。学生数増大の主な理由は、①他学部に比べて、民間企業への就職が有利であること。即ち、教員・公務員の採用枠の減少で民間企業に就職を求める者が多くなっていることです。②西ドイツの伝統的な職業選択・就職制度に起因すること。即ち、民間企業に就職するには、経営経済学部でないと就職できないシステムになっていることです。法学部・経済学部でも民間企業への就職は困難です。経営経済学に関する専門的能力のない者の民間企業への就職は、ドイツ人には理解できないことです。③西ドイツの大学制度では、アビトゥアーに合格した者は、希望する大学で教育を受ける権利を持っていること。従って、大学は勝手に定員を設けることは出来ません。④ドイツの大学制度では、四年間の徹底した理論的・実践的な専門能力の養成が行われること。従って、民間企業では、大学・学部を評価しますし、学生の大学、学部選択も社会的な評価の上に行われます。マンハイム大学の経営経済学部の学生数の急増は、このような理由と学部の社会的評価が非常に高まってきているのと一致しています。



ガウグラー教授（左より2人目）宅の中庭にて。歓迎を受ける筆者と家族（写真は筆者の長男誠一郎氏が撮影）

経営経済学部の教員組織は、正教授・客員教授・上級大学教員・大学アシスタント・非常勤講師・ミットアルバイターの教員よりなっています。経営経済学部の教員組織は、一九八九年の冬学期では、総計一三七名です。各講座には、教授を中心に約六名のミットアルバイターと一～二名の秘書がおります。

私の所属したガウグラー教授の講座では、月に二回程講座運営について、教授を中心に綿密な検討が行われ、学期の終わりには、詳細な報告書が配布されます。ガウグラー教授のゼミは、約五〇人程（女子学生が約三分の一）で、他大学の学生、他大学からの再入学生を含め、多彩な学生層で、マンハイム大学の経営経済学部の人気ゼミを感じさせます。ゼミの学生は、大学の中央図書館・学部図書館・講座図書室で、約二時間にわたる発表・討論に耐える準備を行います。また、ゼミでは、大学外の研究者による研究発表や、工場見学等を行い、理論的・実践的な研究教育に力を入れています。私の参加した冬学期のゼミの工場見学では、企業の研究者と大学の研究者による研究発表があり、その発表について長時間にわたる討論会が行われました。また、夏学期の工場見学では、ネッカー河畔の古城見学、森林の散歩、ビール・パーティと多彩な計画が組まれ、教授・学生の交流が行われていました。学期の終わりには、ガウグラー教授ご夫妻の招待で、講座のミットアルバイターおよび私のように招聘された研究者の家族が招待されて、学期終了の慰労会が長時間にわたり盛大に行われました。

大学の研究教育充実の主な企画としては、一九八九年の夏学期には、〝一九九二年EC域内市場統合への歩み〟というテーマで全学部の学生・社会人の公開講座等が組まれたり、また、経営経済学部主催の〝失業の克服〟というテーマでの研究学会等の多彩な企画が実行されていました。その成果は、著者として発行されると聞いています。特に、後者では、多くの企業・行政機関の研究者が参加し、発表者も大学以外の研究者が半数に及んでいました。

大学の国際交流も非常に盛んで、研究者・学生がヨーロッパのみならず、世界の国々から来て、研究・教育に従事したり、学生生活をしています。研究教育は、本来国際的で、国境の無いものであると確信していましたが、マンハイム大学は、〝国境を取り払った研究教育に挑戦〟している大学であります。紙数の制約で、マンハイム大学の研究教育全体に言及できませんが、詳細は他の機会にと思っています。

健闘が目立った'89就職戦線

多数が上場、優良企業に

空前の売り手市場と言われた平成元年度の就職戦線は、年明けまで一部残っていた公務員関係の発表も終わり終了した。

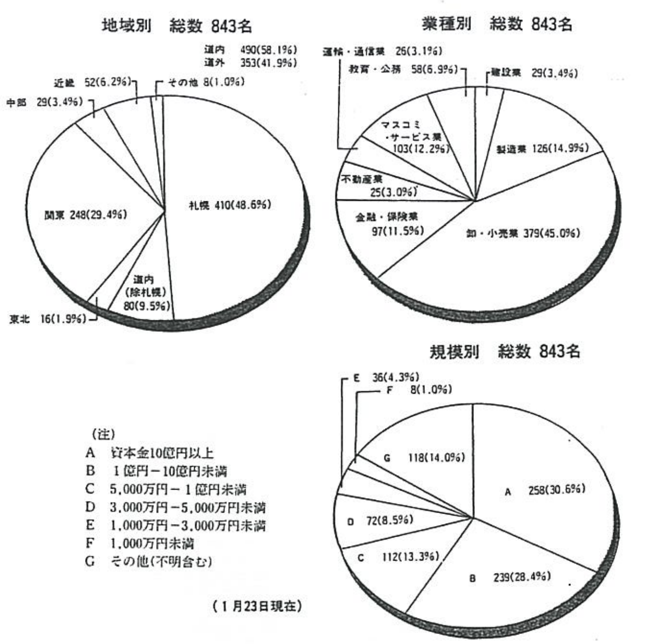
一月二十三日現在、求人社数は二千七百四十四件。急激に高まった本学学生へのニーズを反映して、過去最高の前年度（二千二百六十五件）を二一・一%上回り、記録を大きく更新した。業種別では建設業、製造業、サービス業の増加が目立ち、地域別では年を追って道外の比重が増して、全体の七五%を占めるに至った。

採用内定のペースも例年にない早さで、十月末までには、民間志望者の大半が内定を得た。中身をみても、約二人に一人が上場・優良企業に就職するなど新規開拓を含めて質的向上が大いに目立った。また、公務員・教員についても過去最高だった前年度（六十六名の合格者）並と引き続き好調を持続した。

業種別では、卸・小売業（四五%）、製造業（一五%）、サービス業（一二・二%）、金融・保険業（一一・五%）が多く、地域別では道内五八・一%、道外四一・九%と、これまた後者の比重が徐々に増えてきている。

明年度も今年以上の激しい展開が予想されるが、ここ数年の取り組む姿勢いかんが本学の「出口」の将来を左右することになろう。

グラフで見る就職状況



（1月23日現在）

『売り手市場』の好条件を生かした周到な準備を

就職部長　佐々木　洋

今年四年生となる諸君の〝旅立ち〟の支度が始まりました。

早いもので、つい先日入学したばかりと思っておりました、各位のご子息・ご令嬢が、いよいよ社会的分業の一端を担うべく、これまで二〇数年間にわたった親がかりへの決別・独り立ちに備えています。

自立した社会人としての〝旅立ち〟こそ、真に主体的な人生の始まりだとしますと、まさにこの時期の職業選択の在り方が、間違いなく、二十一世紀の主人公たるこれら諸君の将来を大きく決定づけるでしょう。

決して長くない、今後数箇月間の就職活動が、いかに重要な意義をもつか、おのずと理解されると思われます。

ところで、彼らが新たな担い手として参画しようとする職業世界は、ご父母各位が先刻ご承知のように、この一両年の眼の前に展開しつつある、洋の東西を越えた歴史的大転換にも促されて、日々大きくその様相を変貌しつつあります。超売り手市場といわれる「就職戦線」の背後の、現実の職場世界では、経営戦略は勿論、個々の職種内容に至るまで、それぞれの業界や地方に固有の国際化・情報化等を伴いながら、激しい流動的再編成の渦中にあるといって過言でありません。

従って、近年の売り手市場が、学生諸君にとってかつてなく恵まれた就職環境を意味するとしても、売り手市場の「就職戦線」には売り手市場に特有な留意点がある訳でして、このことを十分に織り込んだ就職活動をしなければ、必ずしも有利な条件を生かすことにはつながりません。

「職業の選択」には、企業・事業所に対する固定観念や、単なる願望・憧れは通用しないのですが、実は、「安定性」や「知名度」だけを追い求める「会社選び」に、売り手市場の落とし穴があると言えましょう。

人手不足とはいえ、企業・事業所は誰でも好い訳がありません。事業及び組織の将来を託しうる人材を求めているわけです。他方、かけがえのない人生を追求しようとする若人にとって、その人固有の資質をどう生かすかという目標が不鮮明なまま、就職が「就社」に終わって良い筈もありません。ですから、決定的に大切なのは〝どこで、何をしたいのか〟を明確にすることでして、そのために、まず〝自己分析〟つまり自分自身をよく理解し、それを前提に業界研究・企業研究を重ねることで、目標を的確に絞りこむことです。

本学就職部・課は、学生諸君の一人々々が、周到な事前準備を重ね、悔いのない就職活動が展開出来るよう、この期特別の多様なガイダンス実施、就職ハンドブック・その他資料の配布、各種情報の提供、個別の相談・助言、等万全の支援体制を敷いておりますが、我々としては、ご父母各位におかれましても、学生諸君に対し、この道で定評のある本学就職部スタッフのノウ・ハウ及びネット・ワークを存分に活用するようお口添えを戴きたく宜しくお願い申し上げます。

後輩諸君へ！

内定者は語る―チャレンジあるのみ、自信を持て！

昨年10月末の第1回就職ガイダンスを皮切りに、先輩体験報告会、個別面接、業界研究会など'90就職戦線はすでにスタートしている。就職活動、学生生活のエピソードなど、後輩へのアドバイスをおりまぜて、就職の内定した9人の学生に語ってもらった。

新聞を読みつくす

㈱北海道新聞社内定

三浦　雅典（商学部商学科4年）

後輩の皆さんがこれから行う就職活動について、私が一言いっておきたいことは、自分が卒業してから、どのような職業につきたいかを早めに決めておくことです。

私の場合は、入学した時から、生活費などは一切自分で賄わなければならなかったので学生生活はアルバイトの方に傾いていたと思います。そのアルバイトを選ぶ時に、ただ単にお金を稼ぐだけでなく、四年間を無駄に過ごさない為にも、就職に役立つ物を探しました。運よく自分の興味のあるマスコミ関係の仕事が見つかり、そこで就職はマスコミ以外考えられないと再確認し、私の場合は一年生の後半から、北海道新聞と日本経済新聞を一日も欠かさず、約五時間かけて読みつくしました。大変でしたが就職活動に新聞を読むことは、どの分野にも役立つと思います。

フルマラソンに挑戦！

㈱アシックス内定

斉藤　真美（商学部商学科4年）

皆さんの友人の中には、すでに社会に出て仕事をしている人がいると思います。大学へ進学した私達は、彼らが持てない四年間もの自由時間を手に入れました。私の場合、この時間をマラソンに費やしました。学園創立四十周年記念行事でグアムとホノルルでフルマラソンを走ったり、四十時間、五十時間のリレーマラソンに挑戦するなど、普通ではできない経験をしました。

練習不足で出場したあるフルマラソンの大会。完走は無理だと思って走り始めたのが、いつの間にか本気になっていて、よろけながらも気力だけで走り続けました。結局、完走は出来ませんでしたが、自分の中に倒れる寸前まで頑張れるほどの力と根性があることを知りました。

皆さんも四年間を有効に使って、自分というものを発見して下さい。

ツボを押えた勉強が有効

北海道職員内定

斉藤　京成（法学部法律学科4年）

私が公務員試験に向けて勉強を始めたのは大学三年の四月でした。一年の時から課外講座である「法職課程」を受講していた私は、二年次までに法律科目の基礎的な勉強を終え、その後、公務員試験について専門的・具体的に学ぶことのできる「法職」の「公務員コース」へ進みました。「公務員コース」での一年間に及ぶ試験勉強（週三～五日、一日九十～百二十分）と、その予・復習は私にとって相当にハードなものでしたが、結果的に合格できたのですから、苦労のし甲斐はあったといえるでしょう。

公務員試験は出題範囲の広さ故に、効率の良いツボを押えた勉強方法をとる事が有効です。私は法律系科目を絶対の得点源にし、常に一定の得点を挙げられるようにしました。後輩の皆さんも強い集中力を持って合格を勝ち取って下さい。

ゴルフに打ち込んだ4年間

大鵬薬品工業㈱内定

鶴岡　裕巳（人文学部英語英米文学科4年）

私は大学での四年間をすべてゴルフに打ち込んで来たといってもいいでしょう。ゴルフ部での練習は素振り、筋トレ、打ち放しやコースでの練習などですが、特に素振りは何回振ったか見当もつかない程、振って来ました。

その結果か、成績の方は満足できるもので、昨年度は個人戦において北海道学生選手権を含めて全七戦中六勝を上げることが出来ました。

入学する当初から、ゴルフに真剣に打ち込めるのは大学での四年間しかないと考えていたので、常に時間に追われているという焦燥感に駆られて来ました。途中、壁にぶつかった時など、一体何のためにやっているのかと考えたこともありました。しかし、あっという間に過ぎた四年間を振り返ってみると、様々な思い出と共に、今ではまるで試合に勝った時の様な充実感に満たされているのです。

就職課を有効に活用

朝日火災海上保険㈱内定

長崎　聖哉（商学部第2部商学科4年）

私の就職活動は、三年時に行われた就職ガイダンスから始まりました。私は夜間の学生で、昼間アルバイトをしながら学校へ行っていたわけですが、アルバイト先に無理を言って昼間部のガイダンスや、個人面談にも積極的に参加し、就職戦線に対する準備をしました。

そして迎えた四年の五月、就職情報会社等への資料請求を済ませ、学外の就職セミナーや企業研究会にも、積極的に参加しました。この時期の会社セミナーや企業研究会は数社が合同して開催する場合が多く、一回で二、三社の筆記試験や面接のコツを知ることができるため、後で大変役に立ちます。六月は、自分の就職したい業界や、会社を決めなければいけない時期です。早い会社はもう試験を始めています。七～八月になると、あちこちの会社で試験が始まります。あとは自分が蓄積してきた事を全面に出すのみです。就職活動を通して感じたことは、本学が企業から高く評価されているということと就職課を有効に活用することが最大の決め手であるということです。皆さんがんばってください。

熱き心を持て

㈱紀伊國屋書店内定

奈良　英治（人文学部人間科学科4年）

一年生の時、初めて大学の門をくぐった時「自分はここで何ができるか」という声が心の中で響いた。三年生の時に半年間中国に留学した時もその声が聞えた。そして四年生になって就職が決った時も、やはりそうだった。

しかし、今大学四年間を振り返って「自分にはいったい何ができたか？」という問いに答えを出すつもりはない。私が四年間にわたってしてきた事は、「常に未来に語りかけること」だ。だから四年間の自分の評価を形であらわそうとは思わない。

形あるものはいつか崩れるというが、本当にもちつづける事が難しいものは「形の無いもの」だ。外はまだ寒い冬ではあるが、私の中で「目には見えない力」が熱いほど燃えさかるのが感じられる。

何んでもやってみよう！

山一證券㈱内定

平井富美子（人文学部人間科学科4年）

学生生活をふりかえってみると大学の行事等に深く関わってきた四年間でした。文化会の役員になったのを皮切りに、まずは何でもやってみようと思い、大学祭の委員や、補助学生等、少しでも興味があるものはできるだけしてきました。特に大学祭では、一つの目的に向っておのおの努力することによって達成する事ができるのだと改めて感じました。その結果、やりとげた後の満足感と共に、大勢の先輩、後輩、知人や友人たちと知り合うよいきっかけにもなりました。

大学は勉強する所でもありますが、多くの人と知り合い、又、やる気さえあれば何でも沢山できてしまう所でもあります。何をするかはその人次第ですが、一つの事で満足しないで次の満足感を得る為に常にチャレンジあるのみ！

職場は生活の場

㈱北海道銀行内定

吉川　孝仁（商学部経済学科4年）

「職場は生活の場である」ある企業の人事の方の言葉である。そして、私の就職活動で一番印象に残った言葉でありました。生活の場を得る為に必要なのは、自分自身の努力と工夫であると私は思います。望んだものがすぐ手に入ることなんて、まずあり得ないのだから、それなりの努力と工夫で、いかに自分を、学生らしさを表現するかがポイントになると思います。

これから皆さんが体験する就職活動は、自分の人生を大きく左右するものであり、それだけに職業の選択は、自分との相性をよく考えた上で、最終結論を出すことが必要だと思います。とにかく、自信を持ってがんばれ！　健闘を祈っています。

就職活動の結果は4年間の集大成

富士通㈱内定

久光　尚（法学部法律学科4年）

私が富士通を志望した理由は、富士通が世界のコンピューターメーカーのリーダーであり、その最先端のコンピューターを駆使して社会生活の向上に役立つ仕事をしたいと思ったこと、更に富士通の生涯教育を通じて一流のビジネスマンとしての誇りを持って仕事ができると思ったからである。

就職活動の留意点として私は、早めの会社訪問そしてセミナー等への積極参加を勧める。仮に何社か失敗しても敗因を冷静に分析し、次の成功のステップとする努力を怠ってはならない。最後に私が主張したいのは、就職活動の結果というのは、四年間の自己の集大成であると思って欲しいということである。以上の点を踏まえて後輩諸君の一層の健闘を望む次第である。

平成二年度入試

各科の志願者が急増

平成二年度入試は、推薦入試が十二月八日、九日の二日間で、試験入試が二月八日、九日、十日の三日間の日程で実施された。志願者は急増し、初めて試験場に体育館をも使用するなど、今までにない状況となっている。

出願状況、推薦入試の結果は表の通りである。志願者数は、総計で平成元年度六千百七十三人、平成二年度九千百二十二人と一・五倍近い伸びがあった。学科別には、表Ⅰのように法学部法律学科では二倍以上と伸びが著しく、次いで商学部第二部商学科、商学部第一部商学科がおよそ一・五倍と大幅に増加している。

推薦入試の結果は、表Ⅱの通りである。受験者八百七十八名のうち合格者は五百四十七名で倍率一・六倍と推薦入試として過去最高の倍率となった。（昨年は受験者六百二十五名中、合格者五百十三名で倍率一・二倍）これは前年に比べて志願者の伸び率が大幅に伸びた結果によるもので、前年の志願者六百三十二名に対して本年は八百八十六名と四〇％増となっている。

倍率で一番厳しかったのは人文学部人間科学科の二・五倍、続いて商学部第一部経済学科一・八倍、商学部第一部商学科一・六倍、人文学部英語英米文学科一・六倍、法学部法律学科一・二倍という結果であった。全体では、一・六一倍という倍率となった。

表Ⅰ　平成２年度出願状況（対前年比）

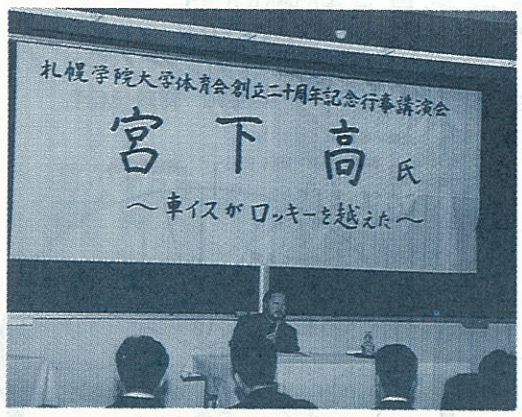
学科	対前年比（推薦＋１期＋２期）		
	'90総計	'89総計	前年比
商学科	2,698	1,829	147.5
経済学科	2,709	2,064	131.3
人間科学科	999	750	133.2
英語英米文学科	384	333	115.3
法律学科	1,894	919	206.1
第２部商学科	438	278	157.6
合計	9,122	6,173	147.8

表Ⅱ　平成２年度推薦入学試験結果

学部・学科	志願者	受験者	合格者	手続者
商学部第一部 商学科	273	270	165	165
商学部第一部 経済学科	237	235	130	126
人文学部 人間科学科	142	141	56	56
人文学部 英語英米文学科	52	52	32	32
法学部 法律学科	113	111	96	96
昼間部合計	817	809	479	475
商学部第二部 商学科	69	68	68	67
合計	886	877	547	542

体育会創立二十周年を迎えて

記念講演会と献血協力運動



感動を呼んだ宮下高氏の講演

本学体育会は、今年度創立二十周年を迎えた。ほぼ大学の開学と歴史を同じくした会も現在では、二十九サークル、約六百名の学生で構成されるまでになった。この間、多数の人材を輩出し、伝統を築いて今日に至ったが、この二十年という節目に「記念に残る何か」をと現体育会本部の役員が中心となり、記念行事を実施することとなった。

行事の企画にあたっては、特別委員会が設けられ、実施案が練られた結果、記念講演会と献血協力活動の二つの行事の実行を決定した。

十一月三十日、講師にカナダの大陸を車椅子で五千キロ走破に成功した、恵庭市在住の宮下高氏をお招きして講演会を開催。ここでは四百名を越える体育会員が参加し、宮下氏の不屈の精神とその貴重な体験談に耳を傾けた。続いて十二月中旬、記念行事の第二弾として献血活動が取り組まれた。体育会が中心となり、積極的に献血を呼び掛けた結果、三日間で体育会員以外の学生約二百名を含め、教職員の協力も得て、最終的に六百四十二名の献血者があり、大成功に終わった。

このように体育会学生の自主的な取り組みは、彼らの二十周年を飾るにふさわしい「形」となって実現し、会員一人一人が二十年の節目を確認したことと思う。

今後、また新たな目標に向かって体育会並びに各クラブの一層の飛躍を期待したい。

福祉実習施設の園児とバレーの交歓試合

昨年十一月十二日、本学が社会福祉実習をお願いしている「黒松内つくし園」から園児十四名が職員引率の下に来校し、本学のバレー部と交歓試合を行った。

「黒松内つくし園」は昭和三十一年創立の養護施設で、恵まれない十八歳未満の児童百八名を収容している。その中で高校生主体にバレー部を作り、初の対外試合にと、毎年実習に来る本学を選んだものである。

試合には実習生や道立保育専門学院の学生も参加し、約三時間、六試合が行われ「黒松内つくし園」の職員・園児混成チームが勝つ試合もあった。

終了後、実習生心づくしの豚汁とおにぎり、それに施設手作りのじゃがいもを頂いた。また園児の作ったしおりが皆に配られ、本学からは学長のプレゼントが園児に贈られた。名残はつきなかったが、再開を約して散会した。

手前は本学バレー部

フォーク村

好評なコンサート活動

大学祭での企画、ライブハウス〝ねずみ小僧〟での奮闘ぶり

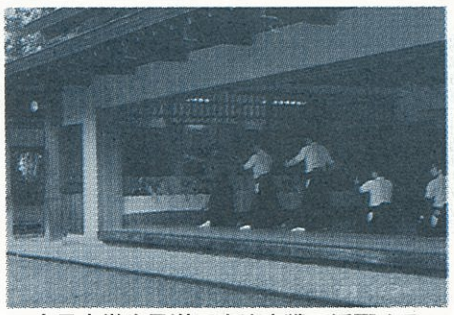
文化系サークルのなかでも、多彩な音楽活動を行っているフォーク村は、年間を通して様々な企画を催している。春は、中央ローンにて新入生を歓迎するコンサートを開き、七月には札幌市内において学外定期コンサートを行って、広く一般の人達にも活動を見てもらっている。また、学内においてもコンサートを随時行い演奏を披露している。

秋の大学祭においては、恒例となったライブハウス「ねずみ小僧」を営業し、部全体で雰囲気を盛り上げた。そして年末には再び学外コンサートを企画するなど、多忙な活動の中、日々練習に励んでいる。今後も独創的な活動にぜひとも期待したい。

弓道部

首位「奪回」に燃える！

全国第三位―女子


全日本学生弓道王座決定戦で活躍する部員（昨年 11 月下旬、三重県伊勢市）

今年度、新たに完成した弓道場のもとで日夜練習に励んでいた弓道部は、前半戦においては、各種の大会で力を出しきれず、不本意な結果に終わった。

迎えた秋の後半戦、北海道学生弓道争覇戦は、昨年決勝まで進出しながらも敗れたという屈辱と同時に、前半の不振をはらしたい部員達一人一人にとって、なんとしても首位「奪回」をという気持ちがはたらいた。

試合はまず、勢いにのって女子が優勝を決め、続いて男子も決勝に進み接戦の末、優勝を成し遂げ、首位「奪回」をみごとに実現した。

こうして男女とも三重県伊勢市にて開催の全日本学生弓道王座決定戦に二年振りで出場することになり、脚光を浴びた。注目の伊勢大会では、男子は一回戦で残念ながら敗退したものの、女子は初戦から調子をつけ、一回戦を突破し、全国第三位という快挙に終わった。さらに、個人においても女子で皆中賞、男子で的中率二位をそれぞれ受賞するなど健闘がめざましかった。

この全国大会の実績は、部員一人一人の今後の自信につながったことと思う。今年度の輝かしい成果をもとに、新年度からの一層の躍進に期待したい。

第10回定期演奏会も大成功

―12月３日　於札幌教育文化会館―

第 10 回定期演奏会の模様

吹奏楽団

五十人を越える団員をかかえ、年間を通して大学諸行事をはじめ様々な催しに積極的に参加し、協力している吹奏楽団は、今年度もこの十二月に最大の行事〝定期演奏会〟を行い、無事に終了した。

今年度の定期演奏会は十回目となり、それを記念すべく、例年にないプログラムを団員達の協力でつくりあげた。当日はOBの方達とのジョイントなども企画され、三時間に及ぶ演奏の後、聴衆から熱い拍手を浴びていた。

新年度もさらに演奏技術の向上が期待できそうである。

洋弓部

新射場での練習実る

２年連続優勝―男子

洋弓部は今シーズンから新射場を本格的に使用して練習に打ち込み、新入部員も多数迎えて春から実力を発揮していった。

五月の北海道学生アーチェリー王座決定戦においては、団体戦で男子は二年連続優勝を成し遂げ、女子も準優勝を果たすなど、好調なスタートとなった。

その後は男女ともにインカレ戦に出場をはじめ、個人戦でも様々な大会で健闘し、地元はまなす国体にも選手を送った。また、秋の新人戦においては、女子が優勝し、来年度以降の活躍も十分期待できそうである。

いずれにしても来シーズン、さらに部員一人一人がレベルアップして善戦してもらいたい。

第２キャンパス射場にて練習に励む部員

羽球部

一部リーグで大健闘

今年度一部リーグ最下位からのスタートとなった羽球部は、まず春季学生リーグ戦に臨み、三勝一敗の成績でリーグ準優勝を果たし、これにより全国大会への出場権を獲得した。続く道地区体を準優勝、秋季学生リーグも苦戦しながらも一部二位の座を守り抜き、新人戦では優勝するなど大健闘した。

十月、福岡においての全国インカレでは、力が及ばなかったものの、部員達にとっては全国のレベルを知る貴重な機会となったであろう。

来年度も一部リーグにおいてベストを尽くしてもらいたい。

写真部

写真展を積極的に開催

写真部も個人の趣味性の強い分野ではあるが、個性的な活動を行っている。部全体で取り組むものは、大半が写真展となっており、年間の活動もこれらの準備・企画に追われるスケジュールとなっている。

四月は新入生歓迎行事の一環で、写真展を行い、五月は三大学定期戦にて写真展、そして十月には写真部最大のイベント〝学外写真展〟、更に二月には卒業写真展というようにカメラを通して得た自分達の作品を積極的に紹介している。

一方、これら行事を成功させる基礎となる部員相互の親睦・交流も大切にし、毎年夏には校外合宿を行っている。

部員達はそれぞれ、大学生活の中で〝何か〟を形に残そうと、今日もカメラを片手に頑張っている毎日である。